



第60回

国際系の学び

国際系は、グローバル化の急速な進展を背景に2000年代以降、学部・学科の設置が続くとともに、人気の高い学部系統だ。しかし、近年は、コロナ禍で海外留学が難しくなったことなどから、志望者の減少が続いている。

2022年度は水際措置も段階的に見直されているが、海外留学を希望していた学生は実際に渡航できているのだろうか。また、コロナ禍を経て国際系の学びはどのように変化したのだろうか。

今回の「注目の学部・学科」では、コロナ禍を経た国際系の学びの最新動向について紹介する。

Part 1では、国際系の学部・学科の概要や教育の特徴、受験生の志望動向に加えて、コロナ禍での海外留学の現状やオンラインを活用した国際化についてまとめた。ハイブリッド型での海外留学の可能性など、コロナ禍収束後の見通しについてもお伝えする。

Part 2では、海外留学の現状やコロナ禍を経ての変化、ジョイント・ディグリー・プログラムなど、国際系の学びに関連するトピックについて、具体的な大学事例から紹介する。

Contents

◆Part 1

国際系の学び 最新動向 p69

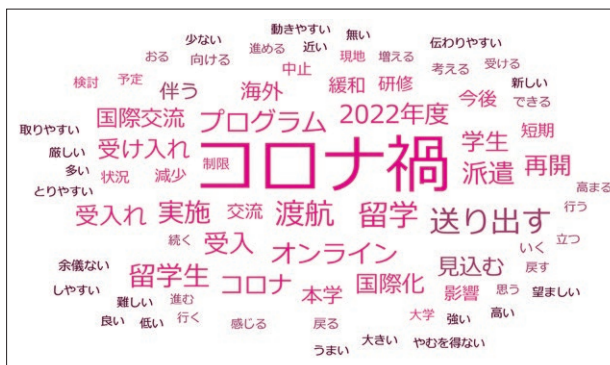
◆Part 2

◎ コロナ禍を経て留学はどう変わったか p74
名古屋大学

◎ 新しい留学のカタチ p76
国際基督教大学

◎ ジョイント・ディグリー・プログラム p78
立命館大学

国際化・グローバル化への コロナ禍の影響、今後の見通し



※「ひらく 日本の大学」2022年度調査(2022年6～8月実施)の回答を、ユーザーローカルAIテキストマイニングで分析(<https://textmining.userlocal.jp/>)。「コロナ禍」「留学」「オンライン」「再開」「渡航」などの単語が多く見られた。

Part 1

国際系の学び 最新動向

制限されていた海外留学も2022年度から再開 コロナ禍を経て進化した国際系の学びの最前線

Point

- さまざまな学問分野を横断的・統合的に学ぶ国際系の学問
- 国際系学部以外でも海外留学を通じた国際系の学びが重要視
- 海外留学が再開。オンラインを活用した新しい国際系の学びも発展

「国際文化」「国際関係」「国際教養」を中心に さまざまな学問分野を横断的・統合的に学ぶ

国際系の学部・学科は、国家間・地域間に存在する問題を分析・解決する力を身につけるために、さまざまな学問分野を横断的・統合的に学ぶ学部・学科である。グローバル化が進展する中で、2000年頃から設置が増えている。思想、歴史、文学など人文科学分野を中心に学ぶ「国際文化」、法学、政治学、経済学、社会学などの社会科学分野を中心に学ぶ「国際関係」、さらに人文科学・社会科学にとらわれず幅広い視野から探究のテーマを考える「国際教養」に大まかに分類できる。ただし、「国際文化学部」でも社会科学系の授業やゼミを開講していたり、「国際関係学部」でも人文科学系の教育を行ったりしている場合もある。教育内容や学部名称は大学によってさまざまだ。

似た系統に外国語系の学部・学科があるが、外国語系では語学の修得を主な教育目標の一つとしているのに対し、国際系の学部・学科では、国際社会の諸問題を解決するために必要な力として外国語によるコミュニケーション力を重視している点などで異なる。

国際系の学部・学科の教育は 実践的な語学教育と海外留学が特徴

国際系は学際的な分野であり、幅広い視点から国際社会について探究できるよう、人文・社会科学系を中心にさまざまな分野の科目を学ぶ。教育の特徴としては、英語教育と海外留学・海外研修に力を入れている点が挙げられる。語学教育（英語教育）については、4技能（聞く、話す、読む、書く）を活用した実践的なコミュニケ

ーション能力の向上をめざし、英語関連の授業科目を設置する大学が多い。大学卒業まで、あるいは海外留学に行くまでに達成するTOEFLやTOEICの目標スコアを定め、学生に英語学習を促す大学や、専門科目の授業を英語で行う大学もある。国際教養大学や早稲田大学国際教養学部などをはじめとして、海外留学・海外研修を必修にしている大学も見られる。留学に行く学年や渡航先などは大学によりさまざまだ。

海外留学を通じた国際系の学び 国際系の学部・学科以外でも重要視

「海外留学」と聞くと、国際系や語学系の学部・学科に進む学生だけが関係するものと考えがちだが、近年は学部・学科に関わらず、教育上重要なものと捉えられている。将来海外で仕事をしたいという場合に限らず、国内で仕事をする場合でも、外国の企業や外国人と無関係でいることが難しい時代である。大学在学中にどのような海外での体験や学修ができるのか、語学力、特に英語力の向上ができるのかは、大学を考えるうえで重要なポイントとなる。

また、海外留学には、異文化コミュニケーション力の向上や多様な価値観への理解が深まるほか、学生の学びに対する意欲の向上、自律的な学修態度の涵養といった効果も期待されている。これは、自分の価値観が通用しない異文化に接する経験を通して自分を見つめ直し、学生自身のアイデンティティを確立することにつながるためだ。

現在、ほとんどの大学が交換留学、短期海外研修など、何らかの海外留学制度を設けている。ただし、その内容は大学によって異なっている。たとえば参加可能人数が

少なかったり、ごく限られた海外留学プログラムしか実施していなかったりする場合もあり、こうした大学に進むと希望に合った海外留学ができないこともありうる。海外留学を希望している生徒、将来国際的に活躍したいなどの希望を持つ生徒には、志望大学の国際化や海外留学の状況を事前に調べるよう指導したい。

コロナ禍の影響で オンラインを活用した取り組みも

国際系の学びに深く関係する海外留学は、コロナ禍での渡航制限によって大きく影響を受けた。2019年に新型コロナウイルスの感染者が報告された後、パンデミック（世界的流行）となり、日本でも2020年2月25日に出入国を制限するなど政府の対策基本方針が打ち出され、海外留学を希望する学生や国際化をめざす大学に大きな影響を与えたのは記憶に新しい。＜図表1＞のように、大学生の海外留学数は、コロナ禍までは右肩上がりが増加していたが、2019年度に減少に転じ、2020年度には98%の大幅な減少となった。2022年度はやや回復したものの、コロナ禍前よりはかなり少ないのが現状だ。出入国が制限され、海外留学再開の見通しが立たない状況

下で、打開策としてオンラインを活用した国際化の取り組みが発展していった。

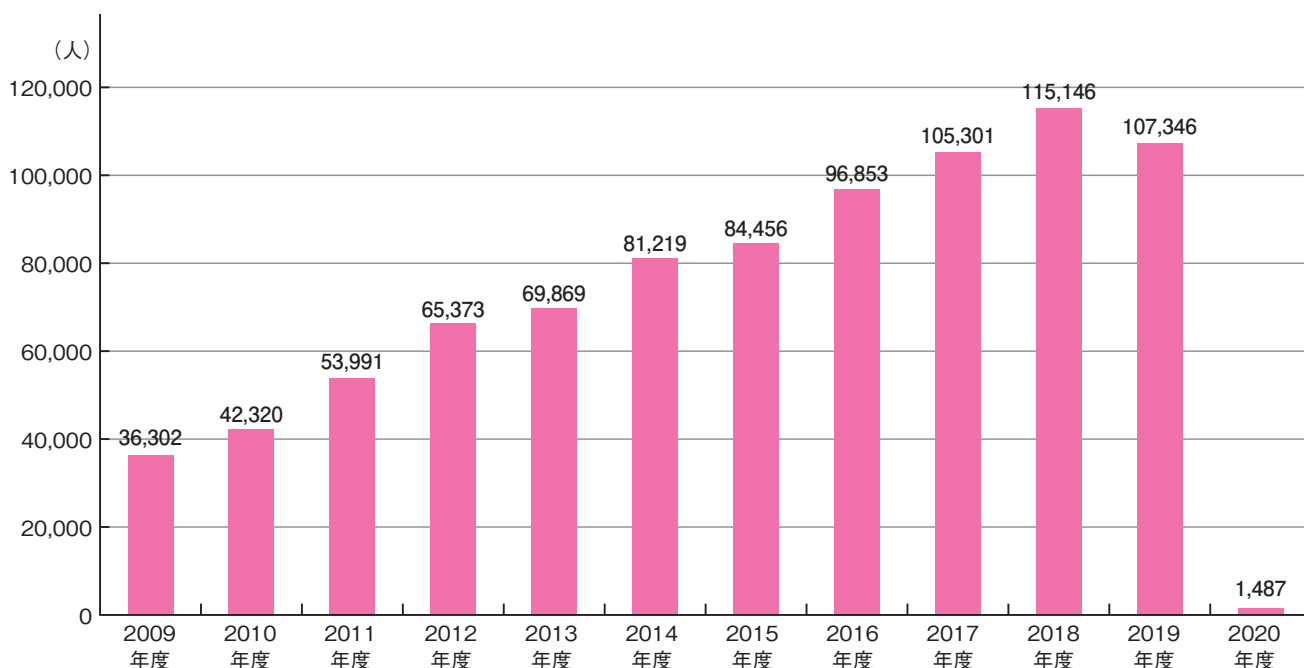
朝日新聞×河合塾の共同調査「ひらく 日本の大学」2021年度調査によると、コロナ禍における大学の国際化において、＜図表2＞の4つの取り組みのうち1つ以上「実施している」を選択した大学は434大学あり、66%だった。特に、海外の大学との交流を実施している割合が高かった。2022年度の同調査でも、送り出しでのオンライン留学（自学の学生が海外の大学の授業・プログラムに参加）は、約5割が実施していた＜図表3＞。設置者別では、国立大で、送り出し・受け入れ（海外の学生が自学の授業・プログラムに参加）ともに実施の割合が高く、コロナ禍においても国際系の学びに前向きであったことがうかがえる。

各大学の具体的な取り組みとして、次のようなことが実施されていた。

オンラインの活用

- オンラインを活用した派遣プログラムとしてバーチャル留学プログラムを開始するとともにグローバル人材育成講義の開講など本学での単位化も拡充した。大阪大

図表1 大学生の留学者数の推移（派遣）



日本学生支援機構「日本人学生留学状況調査」をもとに作成 (<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/nippon/data/2020.html>)

- 海外大学との研究室間交流の実施（コロナ禍においてもオンラインで継続）／英語村や国内ミニホームステイ等、学内や近隣地域で英語によるコミュニケーションの機会を設けている。**公立諏訪東京理科大**
- 国際交流協定校学生とのオンライン学術交流の実施／県内の高校生と留学生とのオンライン交流会の実施。**高知県立大**
- コロナ禍においても、日常的に異文化に触れて国際感覚を身につけるため、留学生や海外の協定校の学生とオンラインで交流するOnline World Café等を実施している。**鳥取大**
- 海外大学と協働で実施する授業の実施（COILプログラム）／APRUコンソーシアム加盟大学が提供するオンライン授業科目を履修するVirtual Student Exchange Program／学生チューター制度を実施しており、本学学生が1対1で外国人留学生の日常生活等へのサポートを行っている（入学後からの一定期間）。**九州大**

経済支援

- オンライン留学への助成金支給（総額の8割程度。2021年度実績）。**弘前大**
- オンライン研修プログラムの参加費補助、コロナ禍で渡日ができない留学生へのオンラインオリエンテーション及びチューター支援の実施。**東京農工大**

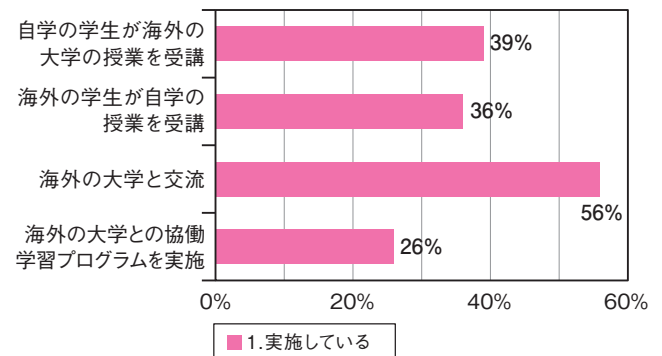
渡航時のサポート

- 送り出しについては、危機管理アシスタントサービス・保険に派遣学生全員が加入するよう危機管理体制を整えた。出発前オリエンテーションを充実させ派遣決定後、毎月行っている。渡航前には危機管理会社による危機管理オリエンテーションを開催している。**札幌大**
- 送り出しの学生へ保護者を含めた渡航前説明会の実施を予定。**城西大**
- 本学学生の留学中、学内のポータルサイトに少なくとも週に1回以上、日誌を記載してもらっている。それにより、学生の現地での状況を把握している。**東京医科大**

（「ひらく 日本の大学」2022年度調査より）

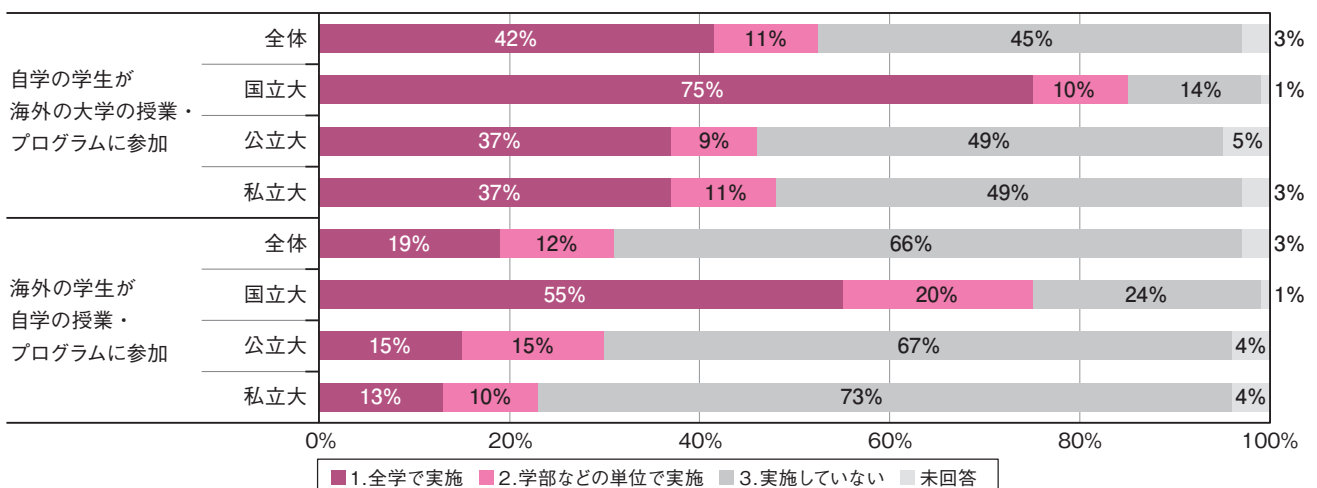
図表2

オンラインを活用した取り組みの実施状況
(n=655)



（「ひらく 日本の大学」2021年度調査より）

図表3 オンライン留学の実施状況 (n=646)



（「ひらく 日本の大学」2022年度調査より）

大学の国際化・グローバル化 今後の見通し

さらに、オンラインを活用した国際化について、海外の大学との交流は約5割が、海外の大学との協働学習プログラムの実施は約3割が、コロナ禍収束後もコロナ禍以前に比べて「増加する」との見通しを示している<図表4>。

また、2022年6月～8月時点での国際化・グローバル化へのコロナ禍の影響と今後の見通しについては、以下のような記述があった。

徐々に回復・平常時に戻す

- 予定どおり留学できないことで学修意欲が低下した可能性がある事例が見受けられる一方、夏季休業中の留学プログラムへの応募件数が増加するなど、学生の留学再開への期待が高まっている。国立大
- オンライン授業の提供やバーチャル交換留学の実施により、留学生の受入を中断することなく実施してきたが、交換留学生の受入数の減少が否めない。2022年度秋学期から完全対面受入を復活させ、留学生の受入数を平常時に戻していく。また、中断していた短期プログラムの対面実施を再開する。公立大
- インバウンド・アウトバウンドに関する海外研修プログラムを実用化する。現地で活動することが留学においては重要と捉えているため、提携を結んでいる他大学・国・地域の感染症への水際対策の確認、拡大が収束すれば、コロナ禍以前に戻したいと考えている。私立大

回復には時間がかかる

- 送り出しの回復が遅れている状態にある。留学希望者は潜在的にはコロナ前と変わらない印象があるが、実際に渡航するということには抵抗があるのかもしれない。回復にはまだしばらく時間がかかると思われる。

私立大

- コロナ禍以前は、年間100名程度の学生を短期研修等で海外に派遣していたが、現在は大学主催の海外研修を中止している。中長期留学の学生派遣は、2022年9月からスタートするが、短期研修の再開時期は検討中。

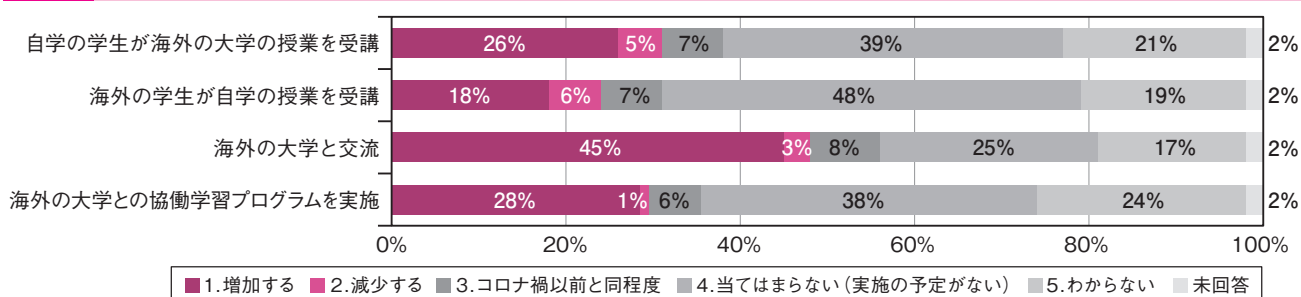
私立大

- 各国のコロナ対応に係る水際対策が緩和される一方、燃料高、円安が進み、航空券その他留学費用の高騰が、留学を実現したい学生の足かせにならないか、心配である。私立大

新たな形の国際交流に力を入れる

- 物理的な往来が制限されたことにより実施が困難な交流がある一方で、オンラインツールの活用によって過去には実施できなかったタイプの交流が生まれ、メリットも認識されたことから、今後は対面の交流とオンライン交流それぞれの長所を活用して国際化・グローバル化を推進していくことになると思われる。国立大
- 新型コロナウイルス感染症の感染拡大や派遣先の安全性等を十分考慮し、対策を講じた上で、実際に渡航する留学を実施したいと考えている（本学では昨年8月から長期の交換留学による派遣を再開）。一方、オンライン留学は学びの機会の拡大、利便性、費用等でメリットがあり、選択肢の一つとして活用できる。公立大

図表4 コロナ禍収束後の国際化・グローバル化への取り組み（オンラインの活用）(n=655)



（「ひらく 日本の大学」2021年度調査より）

●コロナ禍で海外留学ができない学生たちが多くいるため、今後は海外留学派遣者数が増えるものと予想する。また、今後はコロナ禍でのオンライン授業や交流の成果を活用して、海外留学や研修の成果を高めるため、オンラインでの事前学習や交流などを行ってから実際に海外へ派遣するなど、ハイブリッドのやり方が増えるものと予想する。**私立大**

●短期留学プログラムなどは、今後もオンラインを活用する予定。学生が、自由に形態（渡航を伴うか、オンラインか）を選択できるようにすることを考えている。**私立大**

（「ひらく 日本の大学」2022年度調査より）

近年はコロナ禍で人気低迷

海外渡航も再開し、今後の国際系の学びに期待

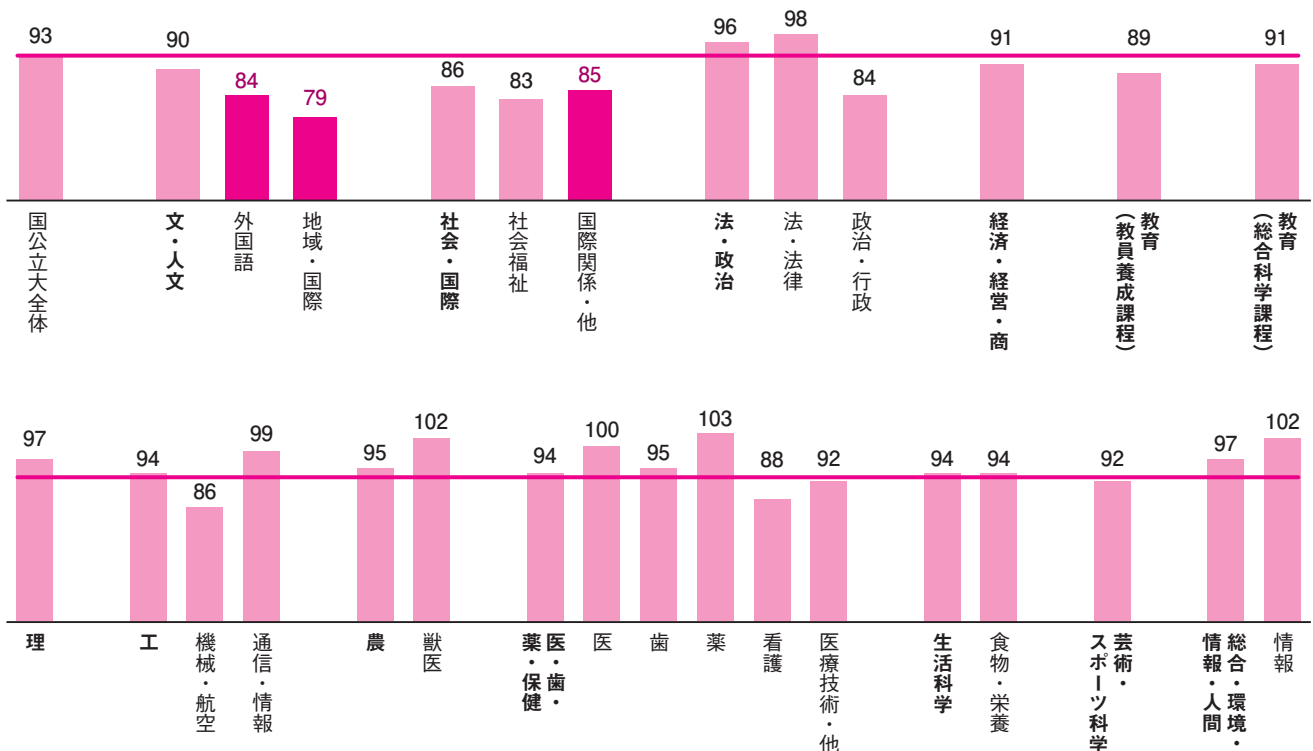
近年の志望動向を見てみよう。「外国語」「地域・国際」「国際関係」などは、人気の高い学部系統だったが、ここ数年はコロナ禍の影響もあり、志望者を減らしてきた。2022年度第2回全統共通テスト模試の志望者数を見

ても、前年度と比べてさらに減少が続いている<図表5>。志望者減少の理由として、国際系の特徴ともいえる海外留学が難しくなったことなどが考えられる。しかし、2022年度に入ってから段階的に水際措置が見直され、現在は海外留学を希望する学生の多くが渡航可能となっているようだ。次年度以降の志望動向にも注目したい。

最後に、コロナ禍は国際系の学びにどういった影響を与えたのだろうか。コロナ禍を経て、オンラインを活用した留学の利点を活用した国際化の仕組み、海外留学の仕組みの利点も見えてきただけでなく、現地で異文化を肌で感じることなど、実際に渡航する意義も浮き彫りになった。さらに、海外渡航とオンラインを組み合わせた新しい留学の仕組みも出てきている。

今回の「注目の学部・学科」では、海外留学の現状とともに、国際系の学びの最新動向を紹介する。いずれの事例も、海外留学を学びの中心に据えたものである。国際系の学びの最前線として、生徒の進路指導に生かしていただきたい。

図表5 2022年度 第2回全統共通テスト模試から見る志望動向



※国立大前期日程で集計。

※グラフ内の数値は志望者前年比(%)、太字は学部系統を、その右側は系統内の特徴のある分野(抜粋)を示す。なお、中系統「文・人文」に詳細系統「外国語」「地域・国際」が含まれている。

※グラフ内の横線は、前期日程全体の前年比93%のラインを示している。

Part 2

コロナ禍を経て留学はどう変わったか

オンライン留学にも一定の効果があることを確認 渡航もセットにしたハイブリッド留学の可能性も

名古屋大学 国際本部 グローバル・エンゲージメントセンター
国際教育チーム 岩城 奈巳 教授

Point

- オンライン留学はあくまでも代替手段。可能な限り渡航留学の可能性を追求
- 語学習得や留学準備の目的であれば、オンライン留学のメリットは大きい
- 海外渡航が可能になり、オンライン留学を組み合わせたハイブリッド留学も



コロナ禍前後で留学意識は大きく変化せず 渡航制限の解除で渡航留学は急速に回復

新型コロナウイルス感染症の蔓延に起因する渡航制限により、留学状況は大きく変化しました。名古屋大学では、在学生の7割に海外経験を積ませる目標を掲げ、留学プログラムの数を増やしてきましたが、その途上でコロナ禍に巻き込まれてしまいました。文部科学省によれば、短期留学や語学留学、単位取得を伴わない海外研修なども含めた日本人学生の留学者数は、2019年度（コロナ禍前）の107,346名から、2020年度（コロナ禍後）の1,487名と98%の大幅減少、本学の留学者数も1,090名から64名に激減しました。

その間、本学では「学生の学びを止めない」をモットーに、コロナ禍が収束したらすぐに渡航できるよう、「留学経験者による留学体験発表会」の開催や「語学力維持のプログラム」への働きかけなど、学生の留学モチベーション維持に努めてきました。現在は、日本を含め多くの国でかなり自由に渡航できるようになりましたが、実は制限解除と同時に、学生の留学熱は急速に回復しています。本学でも全学レベルで提供している留学プログラムは、長期・短期含めてコロナ禍前とほぼ同レベルになりました。コロナ禍の2年間に、留学を諦めて卒業した学生もいましたが、どうしても留学したいと卒業を延ばした学生もいるほどで、学生の留学意識はコロナ禍前後でほとんど変化していないことがわかりました。

一方で、コロナ禍でオンライン授業が普及したことにより、短期留学プログラムもオンラインで提供されるようになりました。留学を希望する学生にとって、新しい選択肢が増えたことになります。そのため、本学でも、渡航制限が解かれた後に、渡航留学と並行してオンライン留学プログラムも提供しましたが、オンライン留学を選択する学生はいませんでした。これだけオンライン授業が浸透していても、やはり「留学は現地に行くものだ」という意識は学生の中に深く根付いているようです。

オンライン留学でも人間関係の構築は可能 「お試し留学」や留学準備であれば効果的

一方で、オンライン留学の効用も見えてきました。本学ではコロナ禍の2021年度、留学する予定だった学生に、渡航留学の代替手段として、海外協定大学のオーストラリア・モナシュカレッジのオンライン留学プログラム「Global Communication for Future Leaders」を提供することにしました。例年、20名前後が留学先に選ぶ協定校であり、オンライン留学でも17名の学生が参加しました。

4週間のプログラムで、午前中は英語の授業、午後は異文化理解の授業で、夕方から夜にかけては現地の学生とワークショップやスポーツ観戦などを通じた異文化交流を行いました。夕方以降は自由参加でしたが、ほとんどの学生が参加していたようで、朝から晩までパソコン画面の前に張り付いていたことになります。

学生へのアンケート<表>を見ると、ほぼ全員が語学力向上の目的で参加したのですが、プログラム修了後には、多くの学生がオーストラリアの文化に興味を持ち、オーストラリアの文化をさらに学びたくなったと回答しています。その後もオンラインでの交流が続き、本学からモナシュカレッジに短期留学する学生や、向こうから本学への交換留学に参加する学生も出てきました。

一般的にオンライン留学は、達成目標が明確な語学科目や、専門科目等で効果を発揮すると考えられています。しかし、プログラム内容を工夫すれば、オンライン留学であっても継続的な人間関係の構築が可能であり、その後の交換留学や海外大学院進学へのファーストステップとしても有効であることがわかりました。

もう1つ、オンライン留学の効用をあげるとすれば、人前で意見を表明する姿勢が身につくことかもしれません。現地の対面授業であれば、困っている状況に対してまわりの人たちからの助けも期待できますが、画面に大映しになって発言を待たれるオンラインの状況では、とにかく自分が何か話さなければ前に進みません。「発言するのに躊躇がなくなった」「度胸がついた」という学生のコメントが、そのことを物語っています。

オンライン留学は、当たり前ですが、渡航費用や滞在費用などのコスト面で有利であり、実際に渡航することに比べて、精神的なハードルが低いことも確かです。「最悪、途中で辞めることもできる」と回答した学生もいるように、留学へのアクションを起こす最初の一步としても有効なようです。その意味で、オンライン留学は、「お試し留学」や留学準備の目的で利用するのではあれば、効果は大きいといえるでしょう。

現在は自由に渡航できる状況へ ハイブリッド留学の可能性も追求

現在は、自由に渡航留学ができる状況になっているた

表 Global Communication for Future Leaders参加学生のアンケート

	プログラムに期待すること	プログラムで満足したこと
学生A	その他(積極性、主体性の向上)	視野を広げること
学生B	視野を広げること	参加学生との交流
学生C	参加学生との交流	語学力の向上
学生D	語学力の向上	参加学生との交流
学生E	参加学生との交流	その他(積極性や挑戦する力が鍛えられたこと)
学生F	語学力の向上	視野を広げること
学生G	視野を広げること	視野を広げること
学生H	語学力の向上	視野を広げること
学生I	参加学生との交流	参加学生との交流
学生J	語学力の向上	視野を広げること
学生K	語学力の向上	語学力の向上
学生L	語学力の向上	語学力の向上
学生M	語学力の向上	視野を広げること
学生N	語学力の向上	参加学生との交流
学生O	語学力の向上	参加学生との交流
学生P	語学力の向上	語学力の向上
学生Q	視野を広げること	語学力の向上

異・岩城(2022)の論文(<https://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/journal/no22/14.pdf>)より作成

め、留学を考えているのであれば、可能な限り渡航留学を検討すべきだと思います。現地でなければ味わえない空気感だったり、文化や考え方の違いだったり、日常生活を通じて全身で感じるができるからです。しかし、感染症への恐怖だけにとどまらず、さまざまな理由で留学が難しい人には、オンライン留学は次善の策として十分な意義があります。その際は、留学目的に応じてプログラム内容を精査することが不可欠です。

最近では、オンラインのメリットを生かして、オンラインと渡航を組み合わせたハイブリッド留学の可能性も見えてきました。「事前に留学先の学生や教員と交流して実験準備や研究テーマをすり合わせておき、留学したらすぐに実験や研究に取りかかる」、あるいは「講義形式の授業をオンラインで受講しておいて、ディスカッションを通して学びを深める演習形式の授業は、互いに留学生を派遣して対面で実施する」など、本学としても新しい留学の形の模索を始めています。

現在は、どの大学も方式を問わず留学には積極的になっています。留学を考えている高校生の皆さんは、ぜひ自分から積極的に情報を取得するようにしてください。

新しい留学のカタチ

日韓の学生が学期の前半と後半で両国を移動し 対面とオンラインで学ぶ留学プログラムを開始

国際基督教大学 国際交流室 島崎 弓子 室長

Point

- 対面とオンラインを組み合わせたLearnUs Global Semester Programを開始
- 日韓の学生が一緒になって相互に両国に留学し、「和解」について学ぶ
- 海外協定校の正規授業をオンラインで受講するVirtual Exchangeプログラムも



対面とオンラインで構成された留学プログラム LearnUs Global Semester Programが始動

国際基督教大学（以下、ICU）は38カ国・地域に100校の海外協定校を持ち、コロナ禍以前は毎年平均450名ほどの学生が長期・短期含めて留学していました。そのため、コロナ禍で留学が制約される中、国際的な学びを提供するさまざまなサポートを行ってきました。その一例として、学期の前半後半で日本と韓国を移動し、オンライン授業と対面授業を組み合わせた新しい留学プログラムが2022年度からスタートしています。

本学は1973年から韓国の延世大学校との間で交換留学協定を結んでおり、長い間交流を続けてきました。現在の学生は、多様な学習体験を望んでおり、1年間の交換留学以外の新しい留学の形態を両大学で模索してきました。そんな折にコロナ禍となり、オンライン授業が導入されたため、オンラインを活用した留学プログラムが検討されるようになりました。その結果、延世大学校が開発したオンライン学習システムLearnUsを創造的に活用して、両国の学生が一緒になって相互に留学するプログラムLearnUs Global Semester Programが誕生しました。

このプログラムは、延世大学校アンダーウッドカレッジの学生10名とICUの学生10名が、1つのコーホート（グループ）を作って参加するものです。前半は20名全員が日本で学び、後半は全員が韓国に渡航して学びます。日本にいるときは全員がICUの授業を対面で受講し、延

世大学校の授業は全員がオンラインで受講します。延世大学校に移動してからは、まったく逆のパターンになり対面授業とオンライン授業が入れ替わります。週末には、授業に関連したフィールドトリップもあり、学生たちは1学期間共に生活し、行動することで絆を深めていきます。なお、授業はすべて英語で行われます。

LearnUs Global Semester Programには「和解」という総合的なテーマが掲げられており、このテーマに沿って両大学の教員が「歴史学」「文学」「コミュニケーション学」「国際関係学」の4科目の授業を行います。また、5つ目の科目としてオムニバス形式の特別授業が用意されており、「和解」の分野で活躍している世界的な研究者や実務家をゲスト講師として招き、対面あるいはオンラインによる特別講義を行ってもらう仕組みになっています。

興味深いのはこのプログラムに参加している学生の専攻がさまざまなことです。ICUも延世大学校アンダーウッドカレッジも共にリベラルアーツ・カレッジで、自然科学分野も含めて学生の専攻は幅広く、日頃から学際的な環境の中で学んでいます。時差のない隣国でありながらさまざまな課題を抱える両国の学生が、忌憚なく多角的な視点からディスカッションできる新しい学びの形として、今後の発展や展開に大きな成果が期待できそうです。

海外協定校の授業をオンライン受講する Virtual Exchangeプログラムに参加

コロナ禍におけるその他の取り組みとして、Virtual

(注) ICUは3学期制であり、1学期は約11週間である。

Exchangeプログラムが挙げられます。多くの留学生を受け入れ、国際的な学びの環境を大切にしているICUにとって、教室に留学生がいない状況は好ましくありません。教室の中の国際性を広げる取り組みとしてオンライン授業を海外協定校の学生にも開放し、また、本学学生の国際的な学びを継続するため、Virtual Exchangeプログラムとして整備しました。

本学では、2020年度秋学期からVirtual Exchangeプログラムを開始しています。本学学生はICUで通常授業を履修しながら、協定校が提供するオンライン授業を1～2科目履修することができ、同様に海外協定校の学生は本学が提供するオンライン開講の正規授業を履修することができます。履修後は他の授業と同様に評価を受け、成績証明書も発行され、卒業単位に編入されます。

Virtual Exchangeプログラムには、Zoomのブレイクアウトルームなどを活用した少人数でのディスカッションも豊富に用意されています。時差はメリットにもデメリットにもなりますが、国際的で多様な学習環境を確保するという点では大きなメリットがありました。

2022年度も引き続き実施していますが、海外協定校の多くが留学生の受け入れを再開しており、対面での授業にシフトし始めています。そのため、今後も同プログラムを継続するかどうかの見通しはその効果を検証しつつ協議していきたいと思います。ただ、オンライン授業における講義方法や少人数のディスカッションなど、技術的にも可能性の広がりを実感しています。ニーズに応じて、今後もオンラインを活用した取り組みを行ってきたいと思います。

オンラインとの「併用」をキーワードに 国際的な環境での多様な学びを提供

ICUではコロナ禍以前から行ってきた留学や、コロナ



禍に始まった新しい留学プログラム以外にも、異文化理解を深める機会を学生に提供しています。

例えばICU Language Buddies & Tablesです。Language Buddiesは、海外協定校で日本語を勉強している学生と、ICUで英語を勉強している学生がペアを作り、オンラインで交流する仕組みです。半分は日本語、半分は英語で話すことになっており、互いの語学力向上に寄与しています。全協定校を対象にしており、ICUでは毎学期平均150名ほどが参加しています。

一方、Language Tablesは、話す言語を決めてランチタイムにコミュニケーションをとってもらう取り組みです。日本語、英語、中国語、フランス語のテーブルがあり、今後スペイン語も始める予定で、少しずつ対面実施を再開しています。

このように、コロナ禍を経て、国際的な学びの環境も多様になってきました。対面をベースにしつつも、オンラインとの「併用」が、新しい学びのキーワードになると思います。大学には、さまざまな国際教育交流プログラムがありますから、ぜひ学生には自分に合ったプログラムを探して、国際的な感覚を磨いてほしいと願っています。

ジョイント・ディグリー・プログラム

日米の学生が同じカリキュラムで学ぶことで 国際的ネットワークのなかで行動する人材を育成

立命館大学 国際関係学部 アメリカン大学・立命館大学国際連携学科
安高 啓朗 教授

Point

- 非西洋的な視点も踏まえて国際間の関係を追求する「グローバル国際関係学」
- 2大学で1つのカリキュラムを構築するジョイント・ディグリー・プログラム
- 正規生として両大学から学修やキャリアに関するサポートを受けられる利点



2つの大学で2年間ずつ学び 4年間で両方の大学の学位を取得

立命館大学は自由主義と国際主義を基本に開学し、当初から国際的な学びに力を入れてきました。国際関係学部も日本では比較的早い1988年に創設し、現在では大半の科目を英語と日本語の両言語で開設しています。昨今では多くの大学が教養的な科目に関して国際的な学びの場を提供するようになっていますが、本学部の場合は、教養的な科目だけでなく、国際関係学という国際的な学問を、国際的な環境で学ぶという大きな特色があります。

国際関係学は、ヨーロッパで生まれ第二次世界大戦後にアメリカで発展してきた学問です。ですから、政治や経済、文化などに関する国家間の関係を解明するのに、どうしても西洋的な視点で捉えがちでした。ところが、現在では非西洋的な視点の必要性が広く認識されるようになっていきます。また、国家だけでなく国際機関やNGOなど、国家以外の組織も国際関係の重要なプレーヤーになっています。そこで本学では、西洋的な視点だけでなく、非西洋的な視点も加え、国際関係に影響を及ぼすプレーヤーすべてについて扱おうとする「グローバル国際関係学」の確立をめざすことにしました。

その舞台となるのが、アメリカン大学・立命館大学国際連携学科のジョイント・ディグリー・プログラム（以下、JDP）です。国際関係学部では学部設立4年目の1992年には大学院レベルでデュアル〔ダブル〕・ディグ

リー・プログラム（以下、DDP）を開始し、その2年後には学部レベルのDDPも立ち上げています。こうした延長線上に誕生したのがJDPで、学部レベルとしては日本初の試みです。

DDPもJDPも、2つの大学に通い両方の大学の学位を取得できる点は変わりません。しかし、DDPでは、1つの大学の卒業要件を満たした上で、もう1つの大学の卒業要件も満たす必要があります。一定程度の単位互換も行われますが、それでも160～170単位は取得する必要があります。4年間で卒業するのはかなり大変です。

ところがJDPの場合は、2つの大学が共同でカリキュラムを構築します。本学の場合はアメリカン大学（AU）との共同カリキュラムになっているため、2年間を京都、2年間をAUの立地するワシントンD.C.で学ぶことで、124単位で卒業することができます。卒業時には、両大学が共同で「学士（グローバル国際関係学）」を授与します。国際的に学び、かつ4年間で日本と海外の大学の学位を取得するには、非常によくできた仕組みといえます。

両大学の学生が同じカリキュラムで学び 両大学の正規生としてのサポートが得られる

JDPでは、最初から本学とAU両大学の正規生として入学することになります。本学から学び始める学生（RU Home Students）は、本学で3セメスター学んだ後にAUで4セメスター学び、最後の1セメスターをまた本学で学びます。一方AUから学び始める学生（AU Home

Students) は、2セメスターをAUで学んだ後、本学で4セメスター学び、再びAUで2セメスター学ぶ形をとります<図>。

JDPの授業はすべて英語で行われます。RUホームの学生も高い英語力がありますが、AUの求める水準はそれよりも高いため、英語力向上に関してはかなり力を入れ、スムーズにAUでの学びにつなげるようにしています。

カリキュラムは、グローバル国際関係学の主要な柱として「グローバル・比較ガバナンス（国際・比較統治）」「アイデンティティ・民族・ジェンダー・文化」「平和・国際安全保障・紛争解決」の3つを掲げ、それぞれをメジャー（主専攻）として学びます。RUホームの学生は本学でそれぞれの導入科目を学んだ上で渡米し、AUで専門的な科目を集中的に学ぶことになります。

RUホームの学生と入れ代わりに、AUホームの学生が本学で学び始めます。入学時期の関係で半年ほどずれてはいますが、「サクラ・スカラーズ」として同じコーホート（集団）として扱うことで、そのつながりは非常に親密になります。このつながりが、卒業後も続くネットワークとして大きく機能するようになります。

JDPの学生は、正規生として両大学からサポートを受けられます。入学と同時に本学とAUにそれぞれアドバイザーが付いて情報を共有することになっているため、シームレスな学修サポートを受けることができます。もちろんAUで学ぶRUホームの学生も、日本語で本学のサポートを受けることができます。さらに、インターンシップや就職活動などのキャリアサポートも正規生として受けることができます。卒業生としてのネットワークにも正規生として加わることができますから、就職や進学の際に大きなアドバンテージになると思います。

図 ラーニングスケジュール

		1年目		2年目		3年目		4年目			
立命館大学 HOME		Spring 1	Fall 2	Spring 3	Fall 4	Spring 5	Fall 6	Spring 7	Fall 8		
		立命館大学	立命館大学	立命館大学	アメリカン大学	アメリカン大学	アメリカン大学	アメリカン大学	立命館大学		
		Core/Foundation/Cohort Courses						Instruction linked to Seminars and Senior Capstone Program		Senior Capstone Program (Seminar)	
		Academic Skills (Building Foundations of Academic Writing)		Research Methods							
		Japanese/English (if necessary)		Thematic and Regional Courses							
American University HOME		1年目		2年目		3年目		4年目			
		Fall 1	Spring 2	Fall 3	Spring 4	Fall 5	Spring 6	Fall 7	Spring 8		
		アメリカン大学	アメリカン大学	立命館大学	立命館大学	立命館大学	立命館大学	アメリカン大学	アメリカン大学		
				Research Methods, Seminars						Senior Capstone Program	
		Core/Foundation/Cohort Courses						Instruction linked to Seminars and Senior Capstone Program			
		Japanese									
		Thematic and Regional Courses									

※JDPでは、立命館大学で学修を開始する学生（RU Home Students）とアメリカン大学で学修を開始する学生（AU Home Students）が4年間、互いのキャンパスを行き来しながら共に学ぶ。

※学修言語は英語

立命館大学HP (https://www.ritsume.ac.jp/ir/jdp/4year_plan/)

コロナ禍で世界中の大学生が留学を見送らざるを得なかったと思いますが、JDPの場合は両方の大学で学ぶことがプログラムの根幹ですから、かなり柔軟な運用ができました。これも、共同でカリキュラムを構築しているJDPの強みだといえます。

国際的な視野とネットワークを活用して より良い世界へと変えていける人材を育成

JDPはまだ1期生が卒業した段階ですから、進路に明確な傾向が見えているわけではありません。国際機関をめざす学生もいますし、大学院進学や民間企業に就職する学生もいます。現代社会はどの分野であれ、グローバルな動きと無関係ではいられないため、グローバル国際関係学を学んだ学生は、そこで得られた知見や視野を生かして活躍できていると思っています。

特筆すべきはAUのあるワシントンD.C.は政治の街であり、AUの学生は高い問題意識を持ち、それに基づいて行動を起こすタイプの学生が非常に多いということです。RUホームの学生もAUでの2年間や、AUホームの学生との交流を通して刺激を受け、「サクラ・スカラーズ」としての世界的なネットワークを生かして、この世界をより良い方向へと変えてくれるような人材になってくれることを期待しています。